

なぜ「律令国家」なのか

—都城・王宮・山城から見えてくる日本列島古代中央集権国家構築の真実—

- 0 ● 「歴史を動かす決定的な要因は、常に恐怖心であり、

恐怖の内わけは外敵・病気・事故・自然の脅威である。」

- 近年において、なぜ正しい歴史理解が阻害されてきたのか・・・国家観の歪曲

1 汎列島中央集権国家の構築

図1 7・8世紀 東アジア図

- ひとえに隋・唐による侵寇から日本列島を防衛するために、列島の各地域を統合して、
国防国家体制（国防軍事国家）を構築しなければならないという切迫した国際情勢があった。
- 中華帝国は中国大陸統合のために中華思想に基づく華夷秩序を構築しなければならなかった。
- 華夷秩序構築とは実際には周囲の国々を征服戦争により服属させ、
あるいは滅亡させることであった。
- 66（68）カ国の国ごとに1～7の軍団を設置。（大毅1・小毅2・校尉5・旅師10・隊正20・主帳1）

〔683・684年（天武12・13）：諸国の境界を定める。〕

図2 日本分国図

大宝令〔軍防令〕に規定／1軍団の兵員は1000人。

推算合計全国19万人の兵士を配置。戸籍に基づき、成人男子3人に1人を徴兵する。

軍団軍事の目的：対「唐による日本侵攻」／「蝦夷征討」

2 飛鳥王宮の時代（630年～694年）

図3 都城変遷図

- 飛鳥以前の王宮・「歴代遷宮」／（630年）以後は「歴代造替」〔7世紀：8代 8世紀：8代〕

- なぜ飛鳥だったのか

図4 奈良盆地南半部の地形と飛鳥

険しい地形に囲まれた狭い土地に王宮を避難させ、唐の侵寇から王権を防護するため。

大和飛鳥は蘇我氏の支配地／同盟国である百済の首都（扶余）防衛方式を導入。

●589年 隋の中国大陸統一（後漢滅亡以後400年間の分裂抗争・内乱の時代の終焉。）

602年 ベトナム北・中部を征服 607・613・614年 高句麗遠征

618年 隋滅亡・唐建国

624年 ハノイに安南都護府（交州都護府）を設置。

628年 唐による中国大陸「天下平定」

629年 北方の東突厥に侵攻。

630年 国王を殺害され、東突厥、滅亡。

631年 高句麗は唐との国境線に1千里の長城を築造。

※唐の征服による国家消滅の例：東突厥・百済を・高句麗・ベトナムなどのほか・

635年／吐谷渾国・640年／高昌国・644年／焉耆国・646年／薛延陀・648年／龜茲・658年／西突厥

2-1 ●630年 舒明政権（中心は蘇我蝦夷）：飛鳥へ初めての遷宮：飛鳥岡本宮（下層宮殿）

緩斜面上の小規模な王宮／建物方位は地形に合わせた非正南北

図5 飛鳥王宮

←取り急ぎ造営した感あり。（636年に焼失）

図6 飛鳥王宮の変遷図

初めての遣唐使を派遣：唐による日本列島への侵攻を回避させようとする外交交渉を使命とした。（公式には626年の玄武門の辺を通じて2世皇帝に即位した太宗・李世民への祝賀の使節）

2-2 ●644年 皇極政権 飛鳥板蓋宮（中層宮殿）

王宮は東西190m以上×南北200m以上の、正方位の方形区画

●645年 大化改新 国家権力の一元化を目的とした政変（朝鮮半島三国でも政変あり。）

公地公民（唐の均田制：口分田）

（＝明治維新）〔「大化改新」虚構論の欺瞞性〕

2-3 ●645年 難波宮を造営・遷都：孝徳政権 難波長柄豊碕宮（652年に完成）

王宮は空前の規模：東西600m以上×南北は東西幅以上

図7（前期）難波宮

〔ただし、立地条件からみると、敵勢の攻撃に対して、きわめて脆弱な、無防備状態。〕

王宮の中核である朝堂院は東西233m×南北281mの大空間（サッカーコート9面分の広さ！）

※難波京という（矩形）都城は存在しない

●646年 改新の詔 公地公民・班田収受法・防人・地方行政制度・など：国家統一への道程

2-4 ●653年 飛鳥還都：齊明（皇極女帝の重祚）政権 **後飛鳥岡本宮**（上層宮殿）

政権は中大兄皇子、中臣鎌足が中心。王宮は、ほぼ飛鳥板蓋宮と同じ規模。

飛鳥では、難波宮にあった広大な王宮は収容できない。

●654年 孝徳帝、難波にて薨去。

●660年 **百濟滅亡（唐13万・新羅5万の連合軍による攻撃）**。唐軍は海路で百濟に侵攻。

百濟王以下12000人が唐の都に強制連行された。

●661年 齊明女帝、百濟の再興を支援するために九州へ遠征。

図8 日本列島と白村江

：朝倉宮（朝倉 橋 広庭宮）にて薨去。皇太子 中大兄皇子の称制（661～668年）

●663年 倭国の27000人の軍勢、百濟・**白村江の海戦**で敗戦：中大兄皇子政権。

●664～669年 西日本各地に防衛施設を築造（狼煙施設〔烽〕・〔水城〕・〔防人〕・古代山城〔城〕）

古代山城 22か所の遺跡（北部九州14・瀬戸内海沿岸7・高安城）

（山岳城塞）飛鳥（大津）の王権を**唐の侵寇から防衛**するための軍事戦略の一環。

ただし、朝鮮半島での山城は唐の大規模軍隊に対しては無効・無益。

（百濟地域で230か所の山城・高句麗地域で800か所）

防人：東国の青年男子中心の構成・・・なぜか？

図9 古代山城分布図

このことに、日本列島統合の真相が反映されている！

図10 北部九州の山城

2-5 ●667年 近江・**大津宮**を造営・避難の遷都（668年、中大兄皇子が天皇即位・天智天皇）

●669年 中臣（藤原）鎌足、没。

●671年 亡命百濟官僚・軍人に高い位階を授与。（山城築造事業などの功績に対して）
天智天皇薨去（異説あり）

●672年 **壬申の乱** 西日本要塞化方策をとる天智政権と、それに危機感を抱く大海人皇子側との、国家の存亡に直結する**国防方策をめぐる路線闘争**としての内戦であった、とみる。

※「天智」の本当の意味！（森鷗外・井沢元彦）

図11 「天智」と「天武」

2-6 ●673年 天武政権樹立・飛鳥へ帰還 **後飛鳥岡本宮** を襲用

天武政権の施策：軍政改革・律令選定・国史編纂・官人制度の整備・宮廷儀式の整備・
宗教統制の強化・地方制度の整備・貨幣の鑄造・官道の整備・条里制の施工など

↑ (百済での統治方式の放棄・唐の統治方式の積極的導入)

中央集権国家体制構築の加速化

その中心となる象徴的事業が唐の都城制度に倣った大規模な矩形都城の造営であった。

●686年7月 後飛鳥岡本宮を **飛鳥浄御原宮** と改称

●686年9月 天武天皇薨去(～690年まで鵜野讚良皇后が称制) ●690年 持統天皇、即位。

3 くけい 矩形都城の時代 (694年～794年)

3-1 ●694年 持統政権、**藤原京** 遷都 (天武朝の初期、676年ころに造営事業に着手)

藤原京は「天武の都」(藤・原・京=とう・げん・きょう=桃源郷！)

10里(5.5km)四方の都城：『周礼』に説かれる理想の都を実現。

中央に2里(1.1km)四方の王宮 **藤原宮**

京城の周囲に羅城が無い。

図12 藤原京と『周礼』考工記の都城像

大規模な矩形都城は、天皇(=皇帝)の権威を示威する政治的な舞台装置である。

●702年 33年ぶりの遣唐使を派遣。[690～705年 則天武后の大周帝国]

702年 持統天皇、薨去。このころ政権の実権は藤原不比等にあり。

●704年 遣唐使、帰国。藤原京造営中断を宣言。

3-2 ●710年 元明政権、**平城京** 遷都 (704年〔文武政権〕には藤原京廃棄・新都造営決断)

8里×9里の縦長矩形：唐都・長安の規模の正しく2分の1(90度回転)

北端中央に2里四方の王宮 **平城宮** : 長安でも王宮は北端中央に配置

朱雀大路の幅75m(長安の朱雀街の幅150m)

図13 平城京と長安

平城京は「(藤原)不比等の都」 ※はじめて羅城を備えた本格的な「都城」であった。

●720年 藤原不比等、没。興福寺北円堂は不比等を讃仰する顕彰の碑。

●729年 2月 長屋王の変 8月 藤原光明子、光明皇后となる。

●735年 **唐は新羅に大同江（現・北朝鮮の平壤を流れる大河）以南の領有を認める。**
唐による侵寇の懸念が減衰する！

← 日本列島が中央集権体制である必然性がなくなることを意味する。

恭仁宮の縮小化の背景。

●737年 日本列島に天然痘大流行（平城京住人の半数が死亡）。藤原氏4兄弟、全員死去。

3-3 ●740年 聖武政権（724～749）**恭仁京**を造営・遷都。

恭仁京は矩形都城ではない。

図14 恭仁宮と平城宮

恭仁宮(大養徳恭仁大宮)の面積は平城宮の3分の1。朝堂院は平城宮の20分の1規模。

737～758年 蝦夷施策20年の空白：蝦夷征討（蝦夷征伐）：日本版の華夷秩序の追求

図15 東北地方の城柵官衙

●743年 **紫香楽宮(甲賀宮)**を造営・行幸。山合いの逼塞した狭い盆地に立地。

●744年 (後期) **難波宮**を皇都と定める

●745年 **平城京**へ遷都

●751年 **唐、タラスの戦いでイスラム軍に敗北。**

●755年 **唐、安史の乱（～764年）**

3-4 ●784年 桓武政権、**長岡京**へ遷都。 未完成の造営。

図16 長岡京と平安京

●785年 9月 天皇の側近であった藤原種統暗殺される。

9月 天皇の弟・皇太子・早良親王を廃する。 10月 廃太子、憤死。

●791年 **安殿親王**、重病罹患。

3-5 ●794年 **平安京**を造営・遷都（～1868年の明治維新まで日本の首都であり続ける。）

未完成の都城。都市計画は平城京の引き写しを基本とする。

●795年 東国防人を廃す。 ●805年 **徳政相論**（平安京の造営工事と蝦夷征討を中止。）

●826年 軍団制度を廃止 ●907年 **唐、滅亡。**

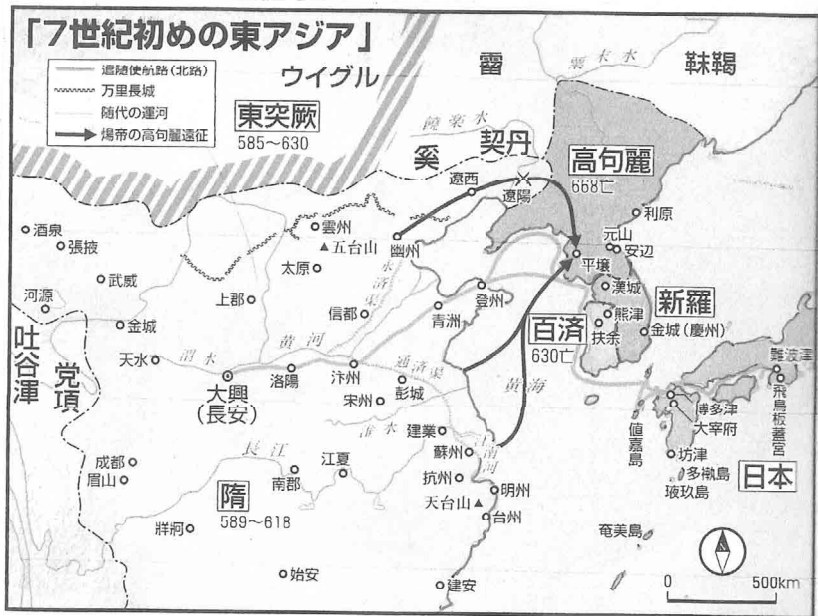
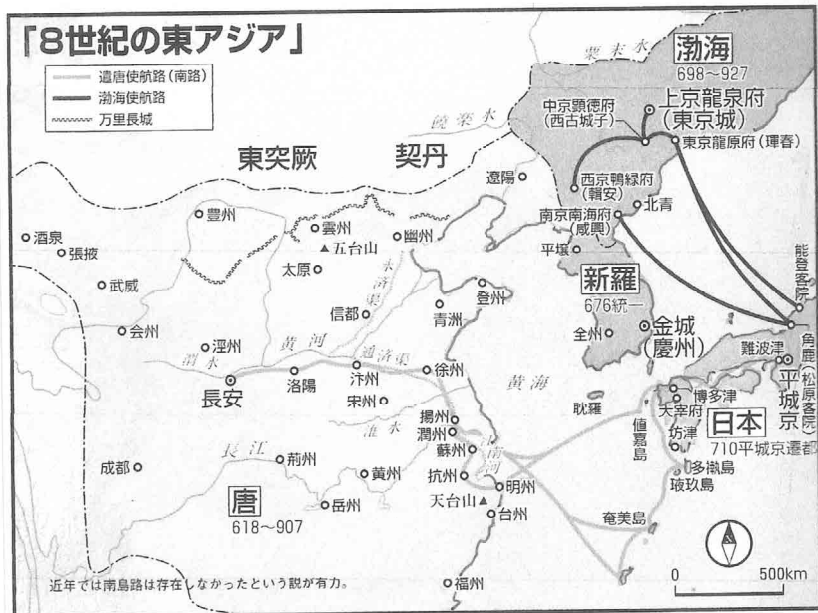


図1 7・8世紀 東アジア図

華夷秩序

- ◆ 中華思想にもとづいた、皇帝を頂点とする世界秩序
- ◆ 国家統一維持のための統治思想



中華思想

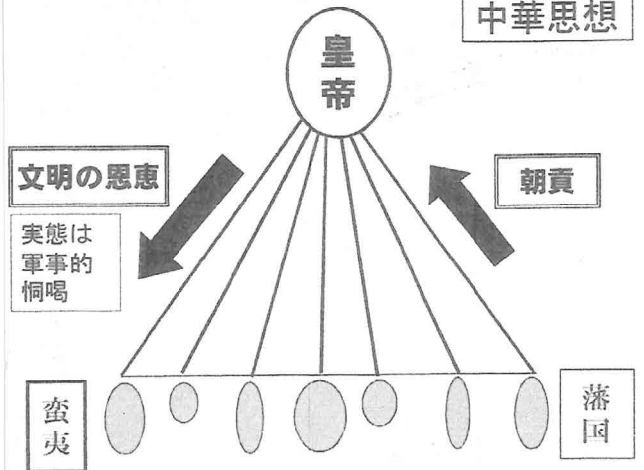


図2 日本分国図



図3 都城変遷図

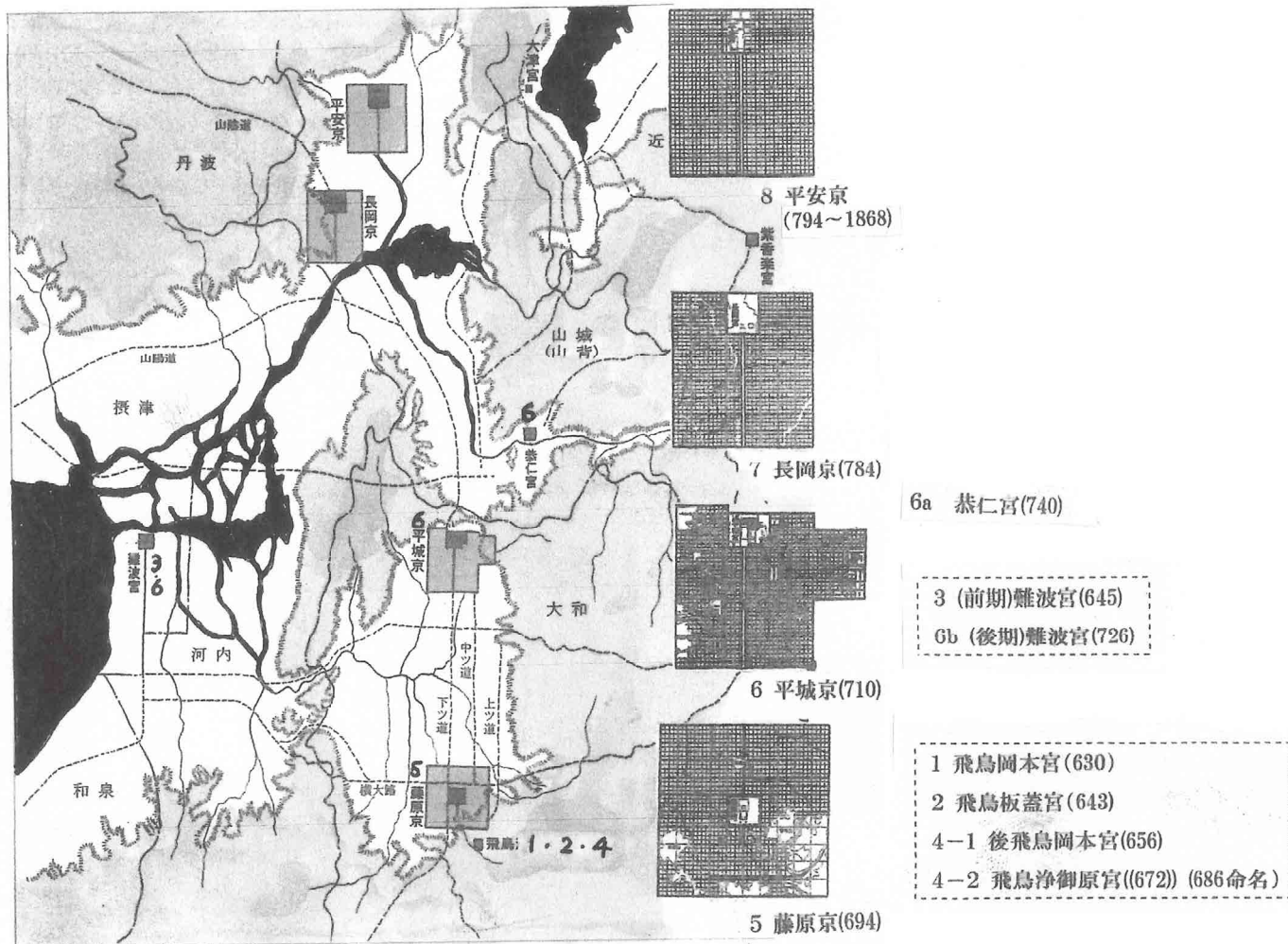
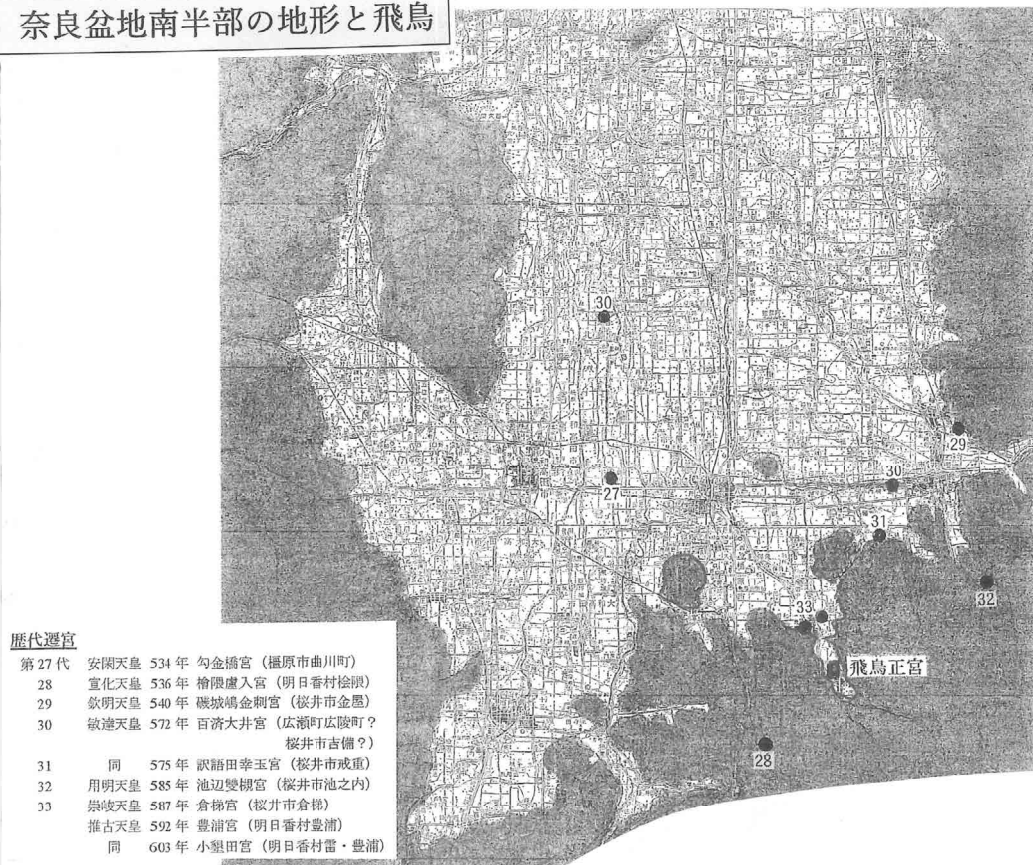


図4 奈良盆地南半部の地形と飛鳥



歴代遷宮

第27代	安閑天皇	534年	勾金橋宮 (攝原市曲川町)
28	宣化天皇	536年	檜隈慮入宮 (明日香村檜隈)
29	欽明天皇	540年	磯城嶋金刺宮 (桜井市金墨)
30	敏達天皇	572年	百濟大井宮 (広瀬町広陵町? 桜井市吉備?)
31	同	575年	訳語田幸玉宮 (桜井市戒重)
32	用明天皇	585年	池辺斐棚宮 (桜井市池之内)
33	崇峻天皇	587年	倉梯宮 (桜井市倉梯)
	推古天皇	592年	豊浦宮 (明日香村豊浦)
	同	603年	小畠田宮 (明日香村畠・豊浦)

図5 飛鳥王宮

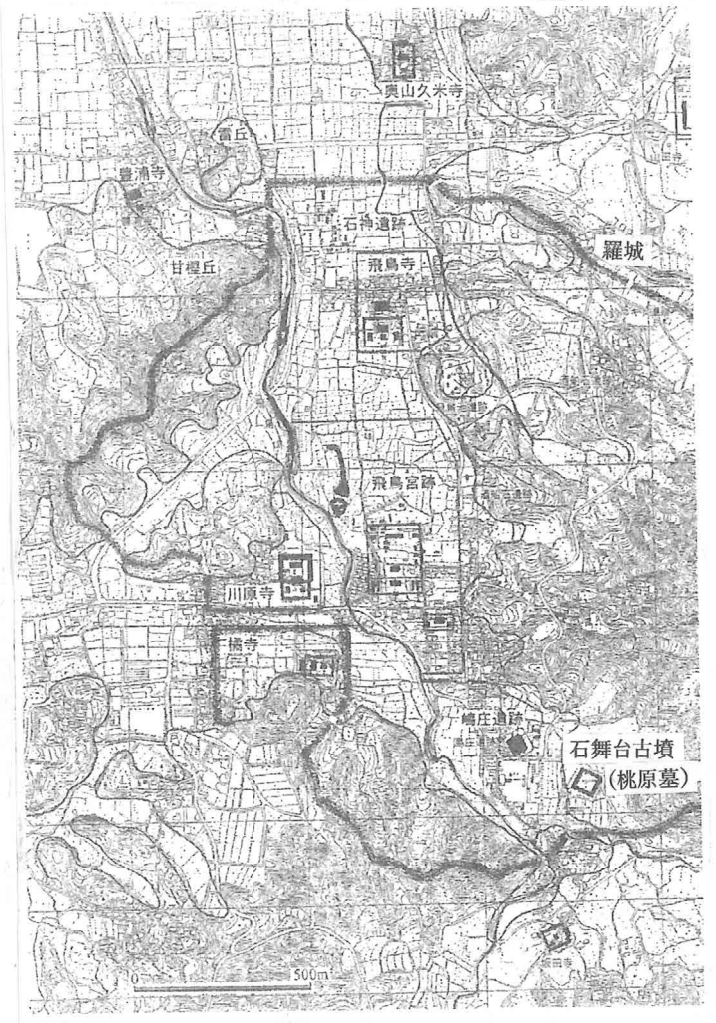
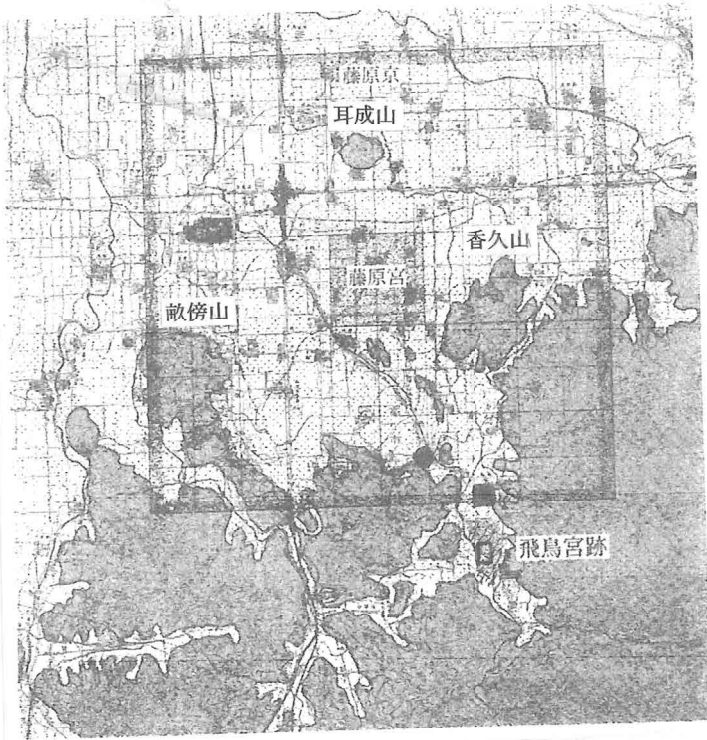


図6 飛鳥王宮の変遷図

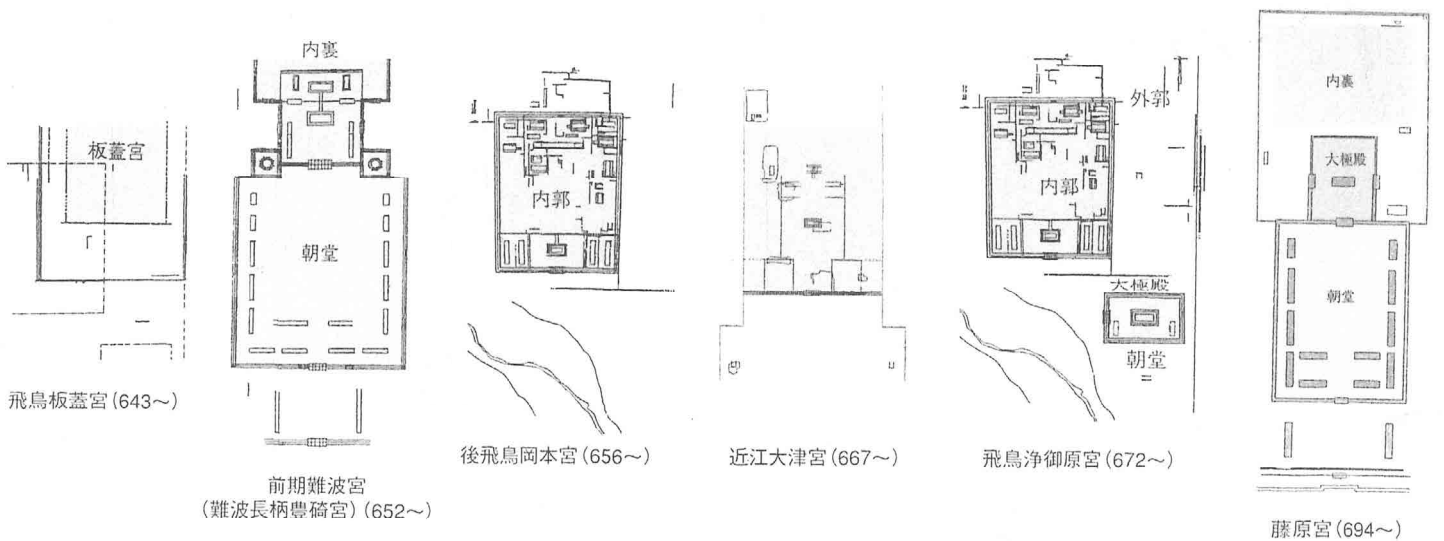


図9 古代山城分布図

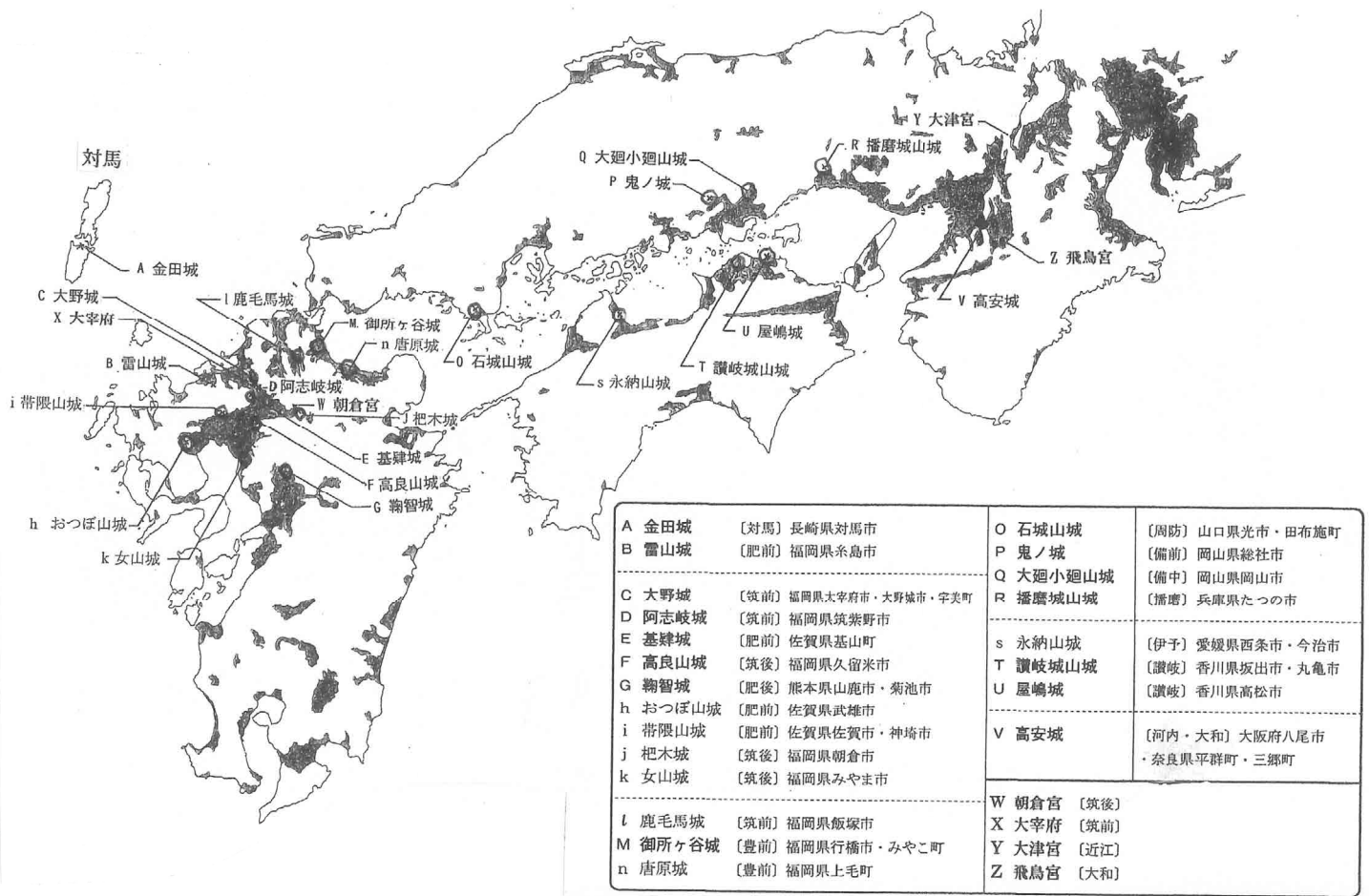


図10 北部九州の山城

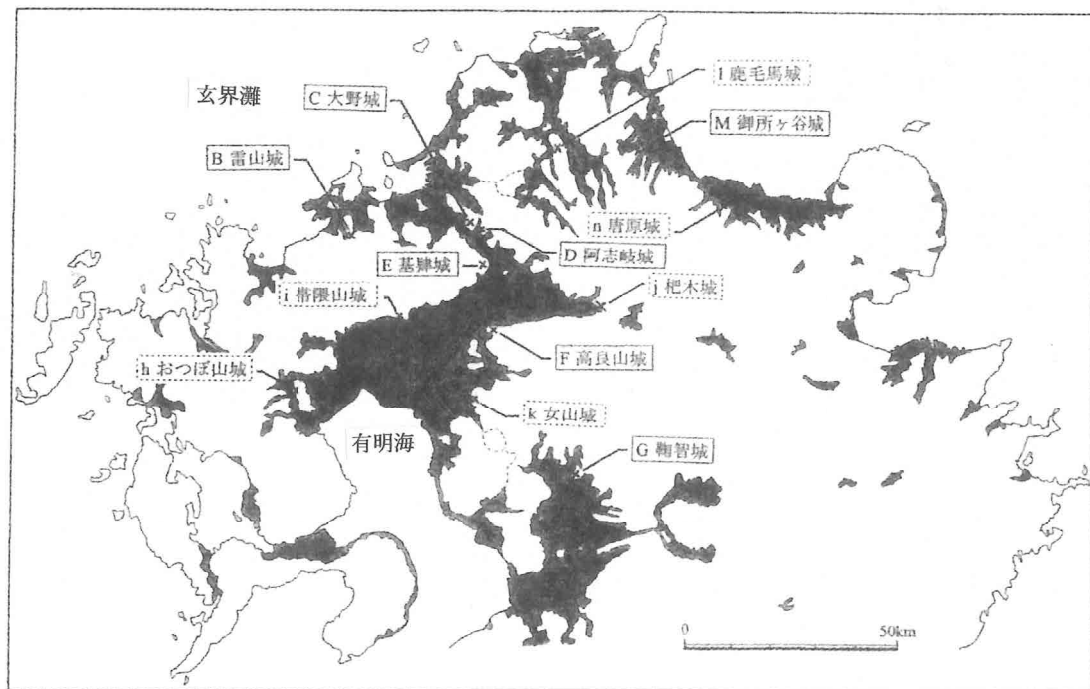
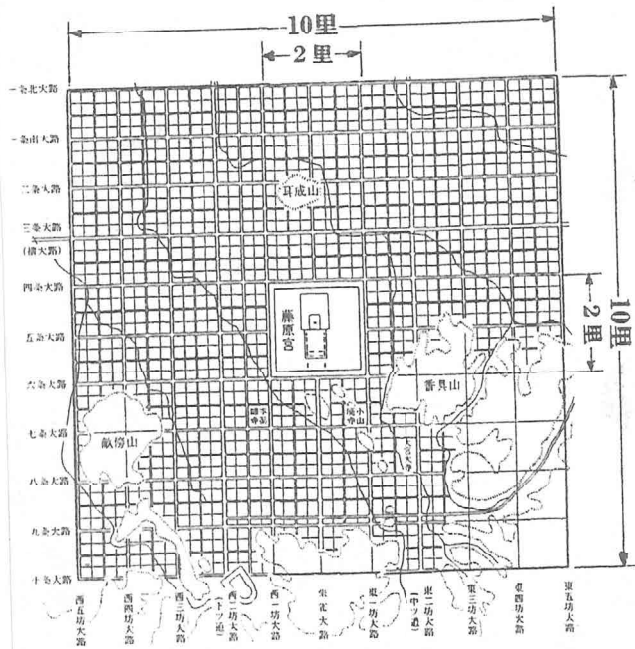


図 11 「天智」と「天武」

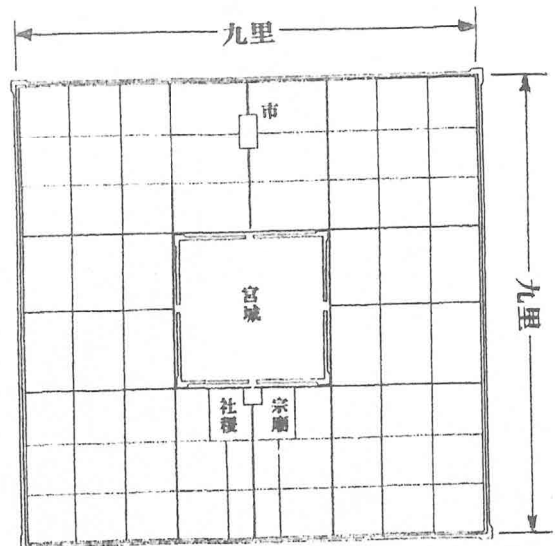
天武天皇と天智天皇の確執に関して、従来意図的か否かは知る由もないが、大方に見過ごされている視点がある。すなわち、「天智」という漢風諡号は、森嶋外の『帝諡考』によれば、殷の紂王が死に際して身まわっていた宝玉に由来する。紂王は帝辛ともいい、殷（商）王朝最後の王。史書の上では悪女・妲己とともに暴戾をきわめた王とされる。ことの真偽はともかく、森嶋外が言及する『周書』に従えば、紀元前一一世紀の頃、周の武王は（牧野の戦いで）殷軍を大破する。紂王は都に逃げ帰り、王宮に火を放って焼身自殺した。死に臨んで、紂王は天智玉と称される四千の宝玉で身を飾ったが、ほとんどが燃えて溶けてしまい、五つ
 の天智玉だけが焼け残った。武王はそれを戦利品としたが、以後「天智玉」とは、非道な、徳を失った君主を討伐し放逐する、つまり放伐するという易姓革命観の象徴的な名辞として理解されるようになったとされる。いっぽう「天武」の諡号は、紂王を放伐した周の武王に由来する。これも『周書』に誌されるところでは、天は、剛疆直理で威勢が強く徳にすぐれ禍や世の乱れを安定させ人民をよく刑罰に服従させ大志をもって窮することのない者に「天武」と諡する、とある。天武天皇に最大限の評価を付与した名辞であり、さらには天武が天智を放逐したことを明示していると理解することができる。（森嶋外『帝諡考』宮内省図書寮編、大正一〇年〔一九二一〕・本書は『森嶋外全集』第二〇巻、岩波書店、一九八八年所収。なお、この件についての認識は、井沢元彦氏の諸論著に導かれてのものである。井沢元彦『逆説の日本史』2、小学館文庫、一九九八年、同『井沢式「日本史入門」講座』2、二〇〇七年、徳間文庫など。）

（井上『日本古代国家と都城・王宮・山城』雄山閣二〇二一 一八五頁）

図12 藤原京と『周礼』考工記の都城像

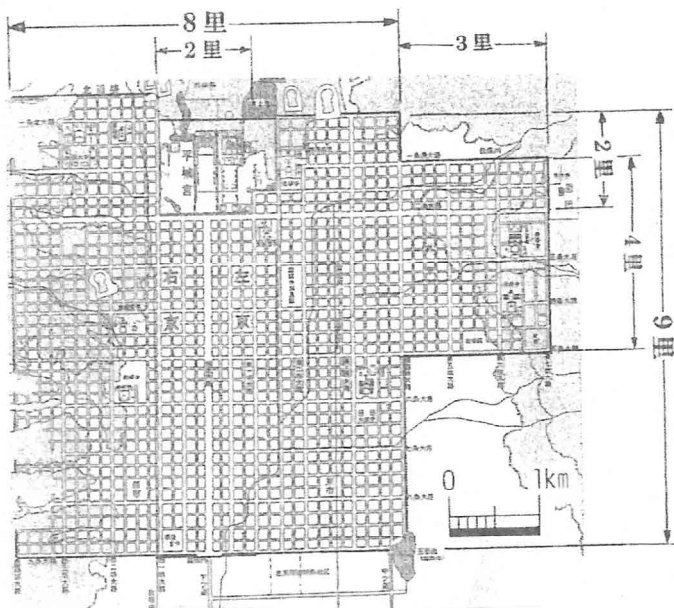


藤原京の形制 (1里 ≒ 531m)

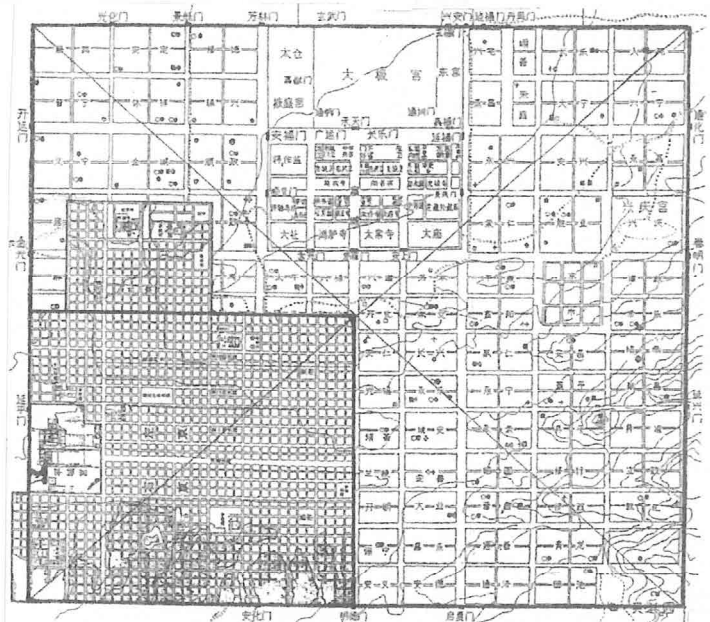


『周礼』王城像の復元

図13 平城京と長安



平城京の形制 (図1と同縮尺 / 1里 ≒ 532m)

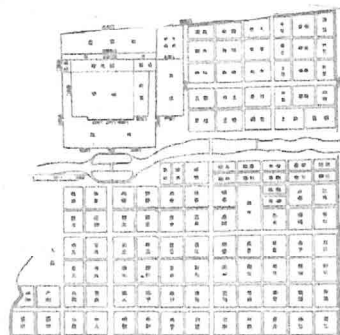


平城京と長安城

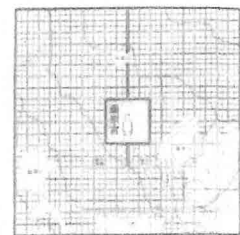
隋・唐 長安城



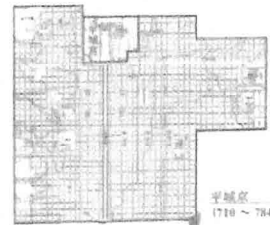
(同じ縮尺)



隋・唐 洛陽城

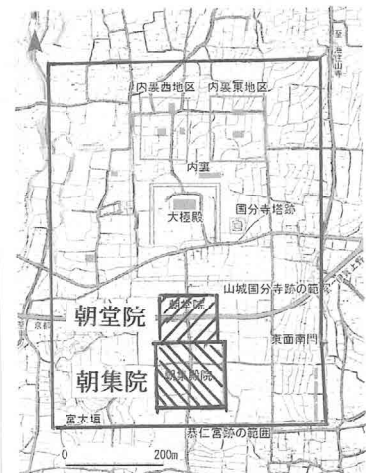


藤原京
694 ~ 710

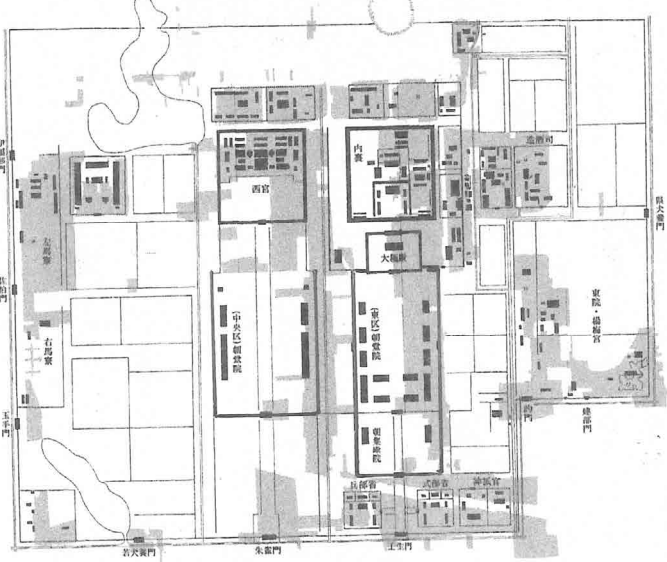


平城京
710 ~ 784

図14 恭仁宮と平城宮



恭仁宮平面図



平城宮域図(上=奈良時代前半期,下=奈良時代後半期) 官衙区画は遺存地割に基づいて推定したものを含む。アミ部分は既発掘地。表示した諸建造物などは必ずしも同時に存在していたものではない。

図16 長岡京と平安京

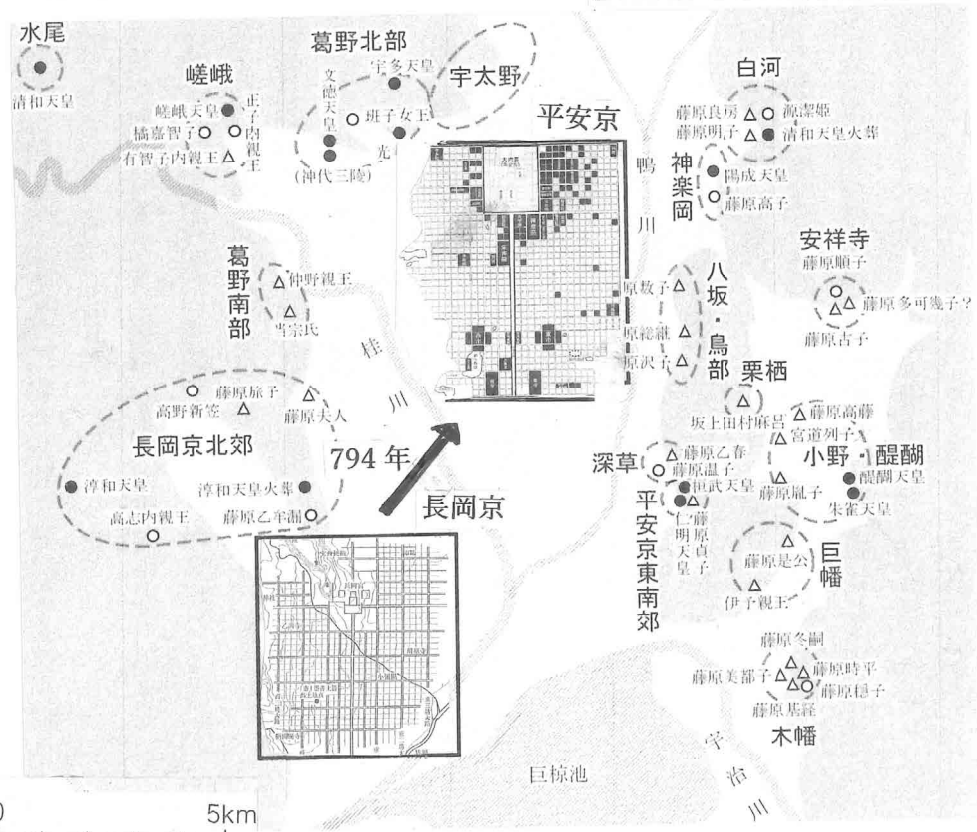
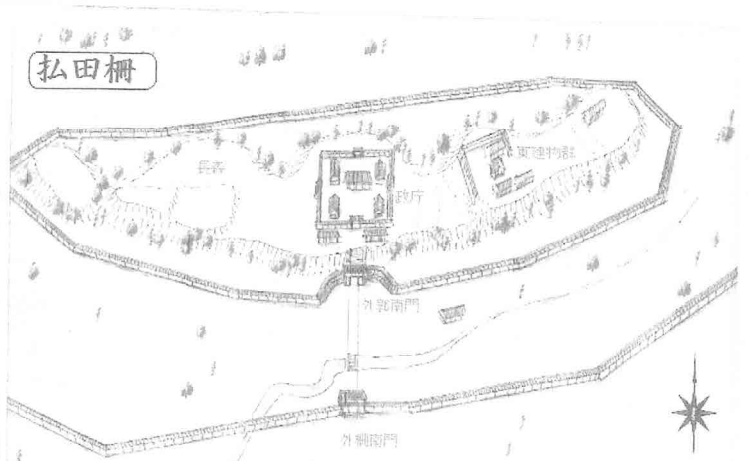


図 15 東北地方の城柵官衙



658 - 660 [齐明4 - 6] 阿部比羅夫による北方遠征 (飽田・淳代・津軽・渡嶋)。	1期
702 [大宝2・文武] 越後国(沼垂・岩船郡)に越中国から4郡(頸城・古志・魚沼・蒲原郡)を移管。単人征討。	2期
708 [和銅1・元明] 越後国に出羽郡を設置。	
709 [和銅2・元明] 征夷	
710 [和銅3・元明] 平城京遷都。	
712 [和銅5・元明] 出羽国を設置(陸奥国から最上・置賜郡を移管)。 出羽=出端(いでは) 陸奥=みらのおく(当初は)	
713 [和銅6・元明] 陸奥国に丹取郡を設置。 大隅国を設置。	
715 [靈龜1] 相模・上総・常陸・上野・武蔵・下野から富民1000戸が陸奥国に移配。	
720 [養老4] 単人が反乱。大隅国守を殺害。	
720-721 [養老4-5] 単人征討。征単人持節大將軍 大伴旅人。斬首・獲虜1400人余。	
720 [養老4・元正] 蝦夷反乱(抜塞使を殺害)・征夷 宮城県大崎市 多賀城創建に先行する百瀬遺跡である権現山・三輪田遺跡と南小林遺跡が火災により廃絶。	
724 [神龜1・聖武] 蝦夷反乱・征夷(持節大將軍 藤原宇合) / 坂東9国・30000人 神龜元年体制(蝦夷統治体制の全面的な立て直し:熊谷公男) 新たな国府として多賀城創建(神龜1) 出土木簡から721(養老5)には造宮開始。 陸奥按察使館内における調審制の停止 玉造柵など5柵と黒川以北10郡の成立 鎮守府(729初見)および鎮兵制(720-724頃:軍国の軍団兵士を城柵に長期常駐)の成立など	
725 [神龜2] 俘囚727人を伊予・筑紫・和泉に配す。	3期
730 [天平2] 防人を停止(746・天平18頃復活)。	
733 [天平5] 出羽柵を100km北進させる(760・天平宝字4までに秋田城と改称)。	
737 [天平9・聖武] 2月:奥羽直路開削(持節大使 藤原麻呂) / 7388人 一軍山遺跡(加美郡家)と墳の越道跡(方格道路網) 宮城県加美町 2月:新羅征伐を検討。	
749 [和銅1・聖武] 陸奥国小田郡で黄金発見。	
755 (唐)安史の乱 《蝦夷施策20年間の空白/征討は50年間の空白》	4期
758-759 [天寶2-3・淳仁] 桃生・雄勝築城 / 8180人 《藤原仲麻呂政権の主導》	
763 (唐)吐蕃が長安に侵入。	
767 [和銅1・桓武] 伊治築城 《東北三十八年戦争(宝龜5~弘仁2)》	
774-775 [宝龜5-6・光仁] 蝦夷反乱(海道の蝦夷が反乱を起し、桃生城を襲撃)・征夷 / 18000人程か	5期
776-778 [宝龜7-9・光仁] 征夷 / 28267人 / 俘囚831人を各地に配す。	
780 [宝龜11・光仁] 覺繁築城 / 3000人	
780-781 [元正11-聖武1・光仁/桓武] 蝦夷反乱(陸奥国上治郡大領・伊治公督麻呂の反乱)・征夷 / 数万人 按察使紀広純を伊治城で殺害。多賀城炎上。 陸奥・出羽国で多数の蝦夷が蜂起。賊4000人。斬首70人余。	
784 [延暦3・桓武] 征夷(持節征東大使 大伴家持-延暦4死去) / 準備のみ 長岡京遷都	
789 [延暦8・桓武] 征夷(征東大使 紀古佐美) / 52800人余 胆沢の戦い:阿豆流為の登場・官軍1306人戦死・新獲した賊首89級	
794 [延暦13・桓武] 征夷(初めて征夷大將軍 大伴弟麻呂・征夷副將軍 坂上田村麻呂) / 100000人 虜150人・首457級・75の村落を焼く 平安京遷都	
801 [延暦20・桓武] 征夷(征夷大將軍 坂上田村麻呂) / 40000人 胆沢・志波の蝦夷を完全に制圧 / 俘囚4000人を胆沢城に移す(最後の城柵への移民)	
802 [延暦21・桓武] 阿豆流為・母礼が降伏。二人は河内国で斬首。	
804 [延暦23・桓武] 征夷(征夷大將軍 坂上田村麻呂) / 中止	
805 [延暦23・桓武] 徳政相論。参議藤原経継「まさに今、天下の苦しむところは軍事と造作なり。」 (参議菅野真道は反対の意見)	
811 [弘仁2・嵯峨] 征夷(征夷將軍 文屋綿麻呂) / 21600人余 / (征夷終結のための征夷)	6期
813 [弘仁4・嵯峨] 蝦夷反乱・征夷	

対蝦夷政策年表



弘田柵 (ほったさく) [秋田県]



多賀城 (たがじょう) [宮城県]

【閑話その三】「藤原京」の名称由来譚、そして「平城京」の意味

私は今、奈良市南郊にある藤原台という住宅地に住んでいます。住所の公式の町名は「藤原町」です。『奈良市史』によりますと「藤原」という地名は古代藤原氏にちなんだものとされています。ある春の一日、うらかな日射しのもとで、猫額ながらも暇にあかして庭の雑草むしりにいそんでいたのですが、ふと気づくと、あたり一帯、しんと静まりかえっています。前には田植えを控えた田んぼがひろがり、空には名も知らぬ鳥たちのさえずりが、、、嗚呼桃源郷とはこのことなのかもしれない、などと感興にひたっていました。ふと「藤原」という名前の由来に思い至りました。

「藤原」でまず念頭に浮かぶのは「藤原氏」であり、私自身長年の間、直接調査研究に携わってきた「藤原京」そして「藤原宮」です。「藤原宮」という名称は日本書紀や万葉集にも頻出するものの、「藤原京」は見られず、歴史的名称ではないとする喜田貞吉の提起（『藤原京再考』『夢殿』一五、一九三六年）

以来、研究上の便宜的表記だとされてきました。ところが近年、古代史学者の西本昌弘氏が、そうではなく、同時代に使われていたとみてもよいことを論証されました（『藤原京と新益京の語義再考』『飛鳥・藤原と古代王権』同成社、二〇一四年）。私は西本説に拠りますが、ではなぜ「藤原」官かといえますと、万葉集巻一―五二の「御井の歌」に、「藤井が原」とあり、岩波日本古典文学大系『万葉集一』の該当歌の頭注には「藤井が原―藤原のこと。藤井（傍に藤のある意か）」という井のあたりの原の意」と、あまり深い意味のなさそうな解説がほどこされているだけです。再度問いましう。なぜ「藤原京」なのか。

藤原京すなわちわが国で初めての大規模矩形都城の造営は、繰り返してききましたように、天武天皇が壬申の乱（六七二年）に勝利をおさめ、政治の中枢を近江・大津宮から再び飛鳥に戻してほくない六七〇年代には着手したものとみえています。

いうまでもなく、その事業の中心に「藤原氏」はかわっていません。私は、平城京こそ「不比等の都」といふべきと考えていますが、藤原不比等が政權で重きをなしてくるのは持統八年（六九四年）の藤原京遷都よりまだ後年のことであり、藤原京の造営に不比等は無関係でした。またその父・藤原鎌足も、すでに天智朝の大津宮時代、六六九年に薨去しています。

「藤原」氏の開祖ともいふべき鎌足ですが、大化の改新の一連の実行者の中心人物・中臣鎌足として史上に登場します。以後、斉明朝、孝徳朝、天智朝（中大兄皇子称制期を含む）で国政の実質的な領導者でした。鎌足は『藤氏家伝』や『日本書紀』によりまずと、前記したように、天智天皇即位二年（六六九）十月に、大津宮のある「淡海の第」（第は邸宅）で薨じるのですが、その前日、天皇は東宮皇太弟（大海人皇子）を遣わして重病の床にある鎌足を慰撫するとともに、「大織冠と大臣（『藤氏家伝』では「太政大臣」とを授け、さらに「姓を賜いて藤原氏とす」。これが「藤原」氏の濫觴です。この時

の「藤原」の由緒を、ある高名で篤実な古代史研究者に尋ねてみましたが、鎌足の生まれたところが「藤原」という地名だったからですよと、あっさりとは答えてくれました。

たしかに、出生の地とされる奈良県高市郡明日香村の小原（かつては大原）には、明治の初期ごろまで藤原寺という寺院がありました（古くは法光寺あるいは中臣寺とも。『大和志料』『高市郡志料』など）。そして寺院のある場所は、本来は五摂家の一つである鷹司家の所有地であったとも伝えられています。鷹司家は藤原北家の嫡流であり、鎌倉時代の一二五二年に、時の摂政であった藤原兼平を開祖として興されました。まさに大原の里が藤原氏に深い縁のある場所として扱われてきたことがわかります。問題は、鎌足が生まれた当時、ここが「藤原」とよばれていたかどうかです。私には、氏族の偉大な祖先である鎌足が生誕した場所として、後々になつて「藤原」の地と言われるようになったと思えるのです。

冒頭の一文に戻ります。藤原町の一角での感懐、

「桃源郷」で、私はハタと膝をうったのです。「藤原京」を普段は「ふじわらきょう」と読みますが、これを音読すれば「とう・げん・きょう」ではないか、と。いうまでもなく、「桃源郷」とは、「帰去来の辞」などとともに、中国南北朝の時代の詩人・陶淵明の代表作とみなされている「桃花源記」と題する詩文に叙述される、他界ないしは仙境ともいうべき理想郷の謂です。何世代も前の先祖達が、秦の時代、戦乱を逃れて住みつき、以後数百年の間、ほかとの通交をまったく断ってきた、山中の夢まぼろしのような村落に、ある漁師がさまよい込んだという物語です。私は天武政権が進めた新たな都城建設という事業は、唐による軍事的な侵寇という危機に対応するために必須の、国家体制の中央集権化を促進する幾多の施策の中でも最重要かつ象徴的なものであったと判断していますが、「新益京」とも表記される新たに建設されつつある大規模都城の呼称を「桃源郷」になぞらえようとしたのではなかったかと思うのです。「桃花源記」の製作年代ははっきりしないもの、おそらく晋・宋の交差期（五世紀の

初め頃）にかかれたものとされています（岩波文庫『陶淵明全集（下）』和田武司の解説による）。そうであれば、七世紀の頃、ほかの多くの典籍とともに大陸からわが列島に将来されており、桃源郷のことはわが国の知識人の間に広く膾炙していたとみても不都合はないでしょう。

とりわけ六世紀の終わり頃以来、中国大陸ではそれまでの内乱にみちた南北朝時代が終わり、統一王朝・隋が、その統一を維持、強化するために強権をふるいつつ外征を展開します。それは大陸内部での安定をはかろうとした国家的行為であったのでしようが、隋を襲った唐もまた西域、印度支那半島、朝鮮半島方面に暴戻きわまりない征服戦争を繰り返した時代でした。また日本列島内でも、外敵による侵寇を避けるべく国内統一を実現するための路線をめぐる権力闘争を重ねるたびに、おびただしい血潮が流された、凄惨な時代でもありました。当時の為政者たちの念頭には、そうした戦乱の悪循環をとどめて、平安な世の中を希求する思いが強烈にあったのではないかと思うのです。それが、鎌足の最期に臨

んで天智天皇（かつての中大兄皇子）が与えた姓「藤原」―「とうげん」という言葉にこめられていたのではないかと思うのです（そして、この姓名は中臣鎌足が望んだのだったかもしれません）。先述した飛鳥の大原にあった藤原寺は「とうげんじ」と呼ばれていたそうです。鎌足の死と藤原京の造営とが、関わりのないものであるだけに、今風に謂えば、平和志向の強い思いは、七世紀後半のあの時代に共通したものであったとも思います。

「とうげん」という言葉は、『日本書紀』に、実はほかにも見えます。推古天皇三四年（六二六）の夏五月二十日のこととして、「大臣薨せぬ。仍りて桃源墓に葬る。大臣は稻目宿禰の子なり。……時の人、嶋の大臣と曰ふ」とあります。前後の記述で明らかのように、大臣とは蘇我馬子のことです。重厚な大政治家であった蘇我馬子の墓は、明日香村嶋庄に所在する巨大な上円下方墳・石舞台古墳であると考えられています。ここでの「桃源」について、岩波の日本古典文学体系の該当部分の頭注には、雄略天皇七年是歳条の「上桃源、下桃源」という地名を

引くにとどめていますが、『日本書紀』では、この二つの地名に続いて「真神原」と並べられています。真神原は法興寺（飛鳥寺）が造営された地にその名をつけたと記録されています（『日本書紀』崇峻天皇是歳条・五八八年）。桃源墓も地名にちなんだ通称であったと思われるのですが、私はあえてそこに馬子の体現しようとした安定した、^{ヤマト} 会の姿をみたいのです。蘇我馬子は厩戸皇子^{ヤマト}、^{ヤマト} 同して、物部氏を中心とする排仏派との戦いに勝利したことが歴史として残されています。しかし、この宗教戦争とされる仏教と在来の神信仰とのせめぎあい一面の現象であり、本質的な背景には、前述した中国大陸の統一王朝―隋・唐―が繰り広げる、華夷秩序構築を^{ヤマト} 目途とした、しやにむな征服戦争に対抗するために避け得なかった、列島内における国内統合のための政治的動向という意味を見失ってはならないと思います。そしてその過程でもまた数多くの人命が損傷され、限らない悲哀が積み重ねられたことだったでしょう。稀代の政治家であった蘇我馬子の切実な悲痛と希求の念を、桃源―とうげん―桃源と読み解く

のは、やはり過ぎた評価でしょうか。

この夢想話を、かつて明治大学の大学院に勤めていたころ、おなじ特任教授仲間(など)というところでも鳥濱がましい限りですが、)でいらした、万葉集、古事記をはじめとして、上代文学についてたいへん厳しい学問姿勢で知る人ぞ知る、秋霜烈日を体現したかのごとき国文学者の神野志隆光先生に聞いていただいたところ、やさしく苦笑いしてくださったことを思い出します。

このついでに、藤原京に続く「平城京」。この名称について、思うところを略記しておきます。「平城」と書いて「なら」と読むのは、近年、平城宮の西面中門である佐伯門のすぐ外側での発掘調査で、和銅年間つまり平城京造営のころの年紀のある木簡に「奈良京」という表記があったことでもわかります。「なら」の語源については諸説ありますが、各説の当否、真偽についての議論は今が割愛することにして、私は朝鮮半島の言語に由来する「ナラ」国・国家」という考えに共感を抱いています。

わが国の古代都城は藤原京、平城京、恭仁京、長

岡京、平安京と変遷します。また奈良時代には難波京が副都として経営されました。この中で藤原京の名称は前述したように「桃源郷」に由来するのではと考えました。「恭仁」の名は、天平一三年(七四二)に、新たに造営された宮を「大養徳恭仁大宮」と名付けたことによります。「恭仁」は「国」を好字で表記したものでしょう。「難波」「長岡」は地名。「平安」は漢籍にちなむ嘉字。では「平城」は?

平城という都城名には、中国大陸での南北朝期にあつて、五世紀から六世紀にかけて存続した北朝・北魏の首府の名称があります。中国思想史の大家である福永光司氏は、北魏は神龜、天平の元号を採用し、聖武、嵯峨という天皇諡号も共通する。また皇帝の子孫を臣籍降下させて「源氏」の姓を与え、る制度を創設したのも北魏であつたと指摘しています(『馬』の文化と「船」の文化』人文書院、一九九六年)。しかし国家を最も象徴するともいふべき国都の名前を直接北魏に求めるには、福永氏の簡潔な説明だけでは不十分だと私は考えます。

「城」とは大陸の都市史にあつては「城壁で囲ま

れた都市」をいいます。この城壁を「羅城」ないしは「羅城壁」といいますが、こんにち中国に行きますと、羅城で囲まれた大小の都市景観が各地に残されています。たとえば陝西省西安市は往古の長安城を踏襲した大都市ですが、ここには明の時代に作り直された壮大な羅城が現存しています。

かつて通説的に語られてきた理解では、わが国の古代都城の特質の一つは羅城が作られなかったことにあるとされてきました。これについては私がこれまでいくつかの論文で実証的に論述したように、藤原京では羅城は築かれなかつたけれども、平城京では、確かに四周に、築地塀を実態とする羅城が築か

れたと判断することができます。平城京もまた、当時の不穏な国際情勢のもと、国威を内外に顯示するには藤原京では不備であるとの判断に基づき、藤原不比等の主導によってようやく完成にこぎつけた都城でした。新都の名称として、名実ともに備わった「城」という文字に、おそらく「たいらかな」すなわち平穩で安寧な社会状況を意味する「平」の文字を組み合わせたのだと思います。国の大地とそこに生きる人々の命と尊厳を、異国の軍隊による蹂躪から子々孫々にいたるまで守り、被支配と隷属の運命を峻拒しようとする決然とした意志を、私は「平城」京という名辞の中に汲みとらざるをえないのです。